

## 中谷宇吉郎 雪の科学館 通信

NAKAYA UKICHIRO  
MUSEUM OF  
SNOW AND ICE

第 7 号

2000 (平成12), 3. 31

発行/中谷宇吉郎 雪の科学館  
〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地  
TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088

## 生誕 100年を祝う取り組み

ミレニアムとして話題になった今年2000年(平成12年)は、「雪博士」中谷宇吉郎の生誕100年の節目の年です。宇吉郎は、明治33年(1900年)7月4日に生まれました。生誕100年を祝い、この機会に宇吉郎のひととなりや業績に触れようという取り組みが、さまざまところで進められています。

宇吉郎が生まれ、「中谷宇吉郎雪の科学館」を建設した加賀市では、生誕100年を記念したさまざまな企画を準備しています。7月1日に「記念式典」と「フォーラム」を開くほか、「雪のデザイン賞公募作品展」、「寅彦と宇吉郎の絵画展」などを開催します。また、宇吉郎の研究が源流の一つになった日本雪氷学会の今年の全国大会は、加賀市の片山津温泉で、10月に開かれます。

片山津温泉は、宇吉郎の生家があったところですが、この地域では実行委員会を作って会合を重ね、町をあげて生誕を祝う準備が進められています。約400人の会員を擁する友の会も、館と歩調をあわせつつ、何本かの特別の企画を準備しており、全般的な動向の把握にも努めています。北海道など、加賀市以外のところでも、友の会会員や宇吉郎のゆかりの人などが中心になり、展示などの企画を準備しています。

さまざまな人達によるこうした取り組みは、できるだけ連携をとりつつ進めることが望ましく、雪の科学館は、その役割を果たしたいと考えています。

そして、今年は、フォーラムのテーマでもある「宇吉郎の世界とその魅力」を探り、現代の課題にそれをどう生かしていくかを考える年にしたいものです。

みなさまの、ご協力と、積極的な取り組みを、お願い申し上げます。

## 新しい本が2冊できました

### こども副読本『中谷宇吉郎物語』

小中学生など、若い世代に宇吉郎のことを知ってもらうために、雪の科学館が制作した副読本が、このほど完成しました。執筆したのは、加賀市在住の児童文学作家の小納弘氏(第1部宇吉郎の一生を担当)と館長の神田(第2部雪と氷の科学を担当)です。36頁、B5、フルカラーの小冊子で、まんがやイラスト、写真を沢山使っています。加賀市内の小中学校で活用するほか、館の受付などで販売します。(税込 300円)

### 『中谷宇吉郎参考文献目録』

宇吉郎について、いろいろな人が、いろいろな角度から書いた文章を包括的に紹介する目録です(746点収録)。宇吉郎の文献に詳しい大森一彦氏(東北工業大学)が編集し、館が制作したものです(80頁、A4)。付録として、よく整備された宇吉郎の著書目録もついています。宇吉郎研究の手引きとして、多くの人に活用していただきたいと思います。(税込 500円)



# 入館者数20万人突破



▲20万人達成をくす玉で祝う。(右、松村さんとお友達 左、藪谷教育長)

平成11年10月10日、入館者数が20万人を突破しました。開館5周年（11月1日）の少し前の達成でした。20万人目になったのは、東大阪市の松村美登利さん。松村さんは、思いがけない出来事にびっくり。藪谷栄一教育長から、記念品として雪の結晶の写真集やテレホンカードが贈られました。

目次	
生誕100年を祝う取り組み 副読本 参考文献目録	1
20万人突破 雪のデザイン賞の状況 寅彦と宇吉郎の絵画展	2
文化人切手に採用 東晃氏の訃報	3
雪氷学会の公開講演会 雪結晶写真集の反響 「生涯」の復刻	4
11年度の行事報告（9ページまで） 上映会 講演会	5
企画展 墨流し実演 雪氷実験 学習会	6
科学工作ひろば	7
兄弟展 講演会	8
兄弟展が終わって（法安桂子）	9
大英博物館と宇吉郎の雪（樋口敬二）	10
アラスカ大学の宇吉郎の展示	11
生誕100年スケジュール	12

## 「雪のデザイン賞」一次審査を109点通過

生誕100年を記念して加賀市が募集した「雪のデザイン賞」（募集期間：1999年10月1日～2000年3月6日）には、海外からも含む229の個人や団体から、303点の応募がありました。これを県別にみると、石川67人、北海道28人、東京27人の順で、35都道府県からの応募です。海外からは、イタリアの2人から応募がありました。イタリアのデザイン雑誌にこの賞が紹介され、ヨーロッパの各地から、質問のファックスが届く一幕もありました。

今回募集したのは、雪や氷をモチーフにしたデザイン作品ですが、応募作品のジャンルは、アート、オブジェ、テキスタイル、陶器、漆芸、照明など、多岐にわたりました。

応募の際、作品を撮影したスライドが提出されま

したが、3月22日、川上元美氏（審査委員長）ほかが出席して、スライドによる一次審査が行われ、109点が通過しました。今後、5月18日の最終審査により、金賞以下の各賞が決まります。

その後、6月17日から7月2日まで、加賀アートギャラリーで開催する「雪のデザイン賞公募作品展」で、一次審査通過の全作品を展示する予定です。そして、7月1日の「生誕100年記念式典」で、金賞受賞者の表彰が行われます。

さらに、「湯のまち雪のデザイン展」（9月9日～11月5日）として、片山津温泉の検番や旅館に分散展示する予定があり、札幌での移動展示（2001年の1～2月頃）も検討されています。

## 師との二人展 「寅彦と宇吉郎の絵画展」

雪氷学会全国大会（10月1日～5日）の期間を挟む9月23日～10月15日に、「寅彦と宇吉郎の絵画展」を開催します。

宇吉郎は、師・寺田寅彦について、「もし先生を知らなかったら、私は今日とはまるでちがった線の上を歩いていたことだろう」（「寺田先生の追憶」）と書いています。宇吉郎は、寅彦から、科学や芸術など、多くのことを学びました。そして、二人には共鳴する弦があった、と言われていています。

寅彦の資料の多くを保管している高知県立文学館から寅彦の絵をお借りし、生誕100年のこの機会に、師弟の二人展が実現することになったわけです。絵画の他、二人の交流についても紹介する予定です。会場は、片山津地区会館テリーナホールです。



▲寅彦（右）と宇吉郎（左）（1932年、札幌植物園で）

## 宇吉郎が今年の文化人切手に

今年の文化人切手に、中谷宇吉郎が採用されることが決まりました。11月6日に発売される予定で、長岡半太郎（物理学者）、中村汀女（俳人）と一緒に発行です。

文化人切手は、戦後、わが国の文化の貢献者を内外に紹介することを目的に、1949年と1952年に、計18種類発行され、その中に、宇吉郎の恩師・寺田寅彦も含まれています。

その後、1992年に文化人切手が再登場し、生誕や没後などの節目の人から採用されてきましたが、発行は年3人程度であり、このなかで宇吉郎が採用さ

れた意義は大きいと考えられます。採用決定により、地元などで、生誕100年を祝う動きにはずみがついた感があります。

48年の時を隔てて、寅彦（1952年発行）と宇吉郎がともに文化人切手になり、秋に開催される師弟の「絵画展」にも話題を添えることになりそうです。

なお、切手のデザインができるのは、夏以降になる見通しとのことです。記念切手の発行の際には、切手ファンが「初日カバー」等を求めることが恒例になっていますが、地元の郵便局でも、関心の高まりに期待しています。

雪の科学館の開設に尽力 中谷教室の最後の助教授

### 東晃氏が永眠されました

雪の科学館の開設に尽力され、館の運営委員でもあった東晃氏が、3月23日、敗血症のため逝去されました。78歳でした。

東氏は、東京都の出身で、北海道大学で中谷宇吉郎の門下で雪氷の研究に従事し、宇吉郎晩年の講座の助教授を務められました。その後、1964年、北大工学部に新設された応用物理学科の初代の教授に就任し、宇吉郎が行ってきた氷の結晶の変形の研究を引き継ぎ、X線を使う方法によって、格子欠陥というミクロな機構と氷の変形との関係を初めて明らかにされました。その他、幾多の研究業績があります。日本雪氷学会会長を務められ、国際雪氷学会からセリグマン・クリスタル賞を受賞されました。



東氏は、中谷宇吉郎雪の科学館の構想の段階から、展示専門委員として尽力されました。特に、宇吉郎の没後から、孫野長治教授らの手によって長く保管されてきた宇吉郎関係の資料を、雪の科学館に引き継ぐため、埃を払い、丹念に整理するという根気のいる仕事をやり遂げられました。

開館の後は、運営委員会の際などに、年に1～2回、雪の科学館に来て下さいました。特に、資料の持つ意味についていろいろ教えて下さいました。また、1997年秋の特別展「霜柱と凍上」の際には監修をお願いし、構想の段階から相談にのっていただきました。

1997年の暮れには、「雪と氷の科学者・中谷宇吉郎」（北大図書刊行会）を出版されました。これには、宇吉郎の、科学者としての業績がわかりやすく紹介されており、長く師のそばにあった著者ならではの視点が随所に見られ、高い評価が寄せられています。雪の科学館にとっても、この書は、将来にわたって宇吉郎資料を有効に活用して活動を展開していくうえでの、貴重な手引きになるものです。

東先生は生前、中谷宇吉郎の生誕100年記念行事に参加するため、加賀に来ることを楽しみにしておられました。また、ご自宅の近くの北海道北広島市図書館で、友の会の有志の方たちと、7月に宇吉郎展を開こうと張り切っておられました。

とてもやさしい先生でした。お別れは残念です。しかし、いろいろなかたちで、先生の遺志を継ぐ人達が現れることと思います。雪の科学館も、その決意です。ご冥福をお祈り致します。

## 雪氷学会 10月2日に公開講演会

宇吉郎の研究が源流の一つになった日本雪氷学会の今年の全国大会は、10月1日から5日まで、加賀市片山津温泉の加賀観光ホテルで開催されます。

全国大会のための委員会は、委員長に金沢大学名誉教授の河田脩二氏、幹事長には館長の神田が就き、十余名の委員によって準備が進められています。

全国大会では、沢山の研究発表が行われ、10月2

日午後1時30分に、一般市民に開かれた講演会が開催されます。内容は今後発表されますが、来聴を歓迎しています。

雪氷学会のために全国から加賀市入りする人が多い10月1日、片山津温泉の総湯の広場では、地元による歓迎行事「チンダル食の祭典」が開かれます。

## 写真集『天から送られた手紙』に大きな反響

館が制作した雪の結晶の写真集『天から送られた手紙』（税込 1200円）は、幸い好評を得て、昨年7月の発売開始から約半年で1500部の在庫がなくなり、2回目の印刷を行いました。

この写真集は、宇吉郎と一緒に映画作りをした吉田六郎氏が撮った写真によって、雪の結晶の美と不思議を多くの人に知ってもらうことをめざしたものです。宇吉郎は、雪を「天から送られた手紙」と言いましたが、雪の結晶の写真を「読む」ために、最初に宇吉郎の研究をやさしく解説しています。

この写真集が北海道新聞（8.19）に紹介された日には、1日に60本もの問い合わせの電話があり、職員が対応に追われる一幕もありました。

その後、サイアス（11月号）、秋田さきがけ新聞（10.20）にも大きく紹介され、さまざまな反響がありました。秋田県の十文字町は吉田氏の故郷ですが、その町長さんが、この機会に雪の科学館のことを知り、友の会に入られました。雪氷学会と気象学会の学会誌の書評にとりあげられ、海外に日本を紹介する月刊誌「Look Japan」（2000年1月）でも紹介されました。

なお、本書など、館が制作した出版物は、宇吉郎が研究した北大の、生協書籍部でも取り扱われています。



## 『中谷宇吉郎の生涯』を復刻

太田文平氏著のこの書は、宇吉郎の沢山の随筆をもとにして、これに独自の構成を加え、宇吉郎の生涯をまとめたものです。宇吉郎の、特に人間的な面を知る上で格好の書であり、随筆の有名な部分が沢山入っています。

この本は絶版になっており、入手が難しい状態が続いていましたが、生誕100年の機会に多くの人に読んでもらおうと、加賀市が出版元の学生社と相談し、復刻してもらうことになったものです。従来の版とは装幀等が異なるものになり、5月末頃できあ

がる予定です。今回は一般書店には卸さず、雪の科学館だけで取り扱い、希望者には郵送販売もします（税込 2100円）。沢山の方に読んでいただくことを希望しております。

生誕100年の今年、岩波書店から『中谷宇吉郎集』全8巻が刊行（今年10月に第1巻）されます。この他、『中谷宇吉郎随筆集』（岩波文庫）や『冬の花びら』（高田宏著 偕成社）が増刷されるなど、宇吉郎に関する本が入手しやすくなりそうです。

雪の科学館から郵送によって本を購入するときには、送付先を書いたメモを添えて、送料310円を加えた金額を、「現金書留」か「郵便普通為替」でお送り下さい。何冊かまとめて購入する場合は、問い合わせして下さい。宅急便の着払いをご指定下さい。

# 11年度の行事（報告）

平成11年度に科学館が行った行事をふり返ってご紹介します（9ページまで）。

## 中谷宇吉郎科学映画上映会（4.17・18）

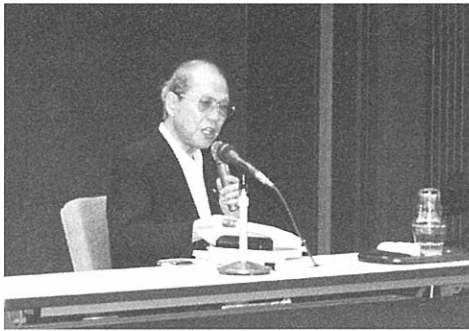
4月18日の発明の日を含む1週間は、科学技術週間として、全国的に科学技術に関連した行事が行われています。館では、これにあわせて、宇吉郎と関連のある科学映画をまとめて上映しました。上映したのは「スノークリスタル（雪の結晶）」（英語版，1939年，12分）、「電線の着氷」（1944，3分）、「北方の霧」（1948，15分）、「霜の花」（1948，19分）、「日本ニュース 氷の花」（1951，2分）、「雪の結晶」（1958，13分）の6本。

このうち、「スノークリスタル」は、戦後ゆくえがわからなくなっていたのを、東京の映画関係者が露天の古道具市で発見し、館と協力して映像を蘇らせ、話題になったものです（通信5号に特集）。映画の合い間には、簡単な作品解説を行いました。また、「スノークリスタル」は英語版なので、OHPを使って簡単な日本語訳を示す試みをしました。

## 講演会（7.3 セミナーハウスあいりす）

講師：小口 禎三氏（元(株)岩波映画社会長）

演題：「私の宇吉郎（シリーズ第3回）－視聴覚教育の先駆者・中谷宇吉郎」



▲講演中の小口氏

宇吉郎は科学映画の分野でも先駆的な業績があり、戦後、多くの優れた科学映画を生み出した岩波映画は、中谷研究室から出発したという歴史があります。

講師の小口氏は、『映画ひとすじ五十年』（1997）の著書がありますが、宇吉郎とともに岩波映画の設立に参画し、「雪の結晶」などの映画制作に参加されました。そして、宇吉郎とは家族的な、親しい交流をしてこられました。

小口氏は、宇吉郎と活動をともにした頃の思い出や、宇吉郎のひとりとなりや考え方について、60枚余りのスライドを使

いながら、語って下さいました。会場からは、宇吉郎の人柄などについて、熱心な質問が出されました。

前年と同様に、このシリーズの講演会は、友の会の総会と合わせて開催されました。

講演の前には、「ニュースヘッドライン」として、スライドを使って、宇吉郎や雪の科学館についてのニュースを紹介しました。

また、後半の友の会総会が始まる前には、「片山津コーラス」によって、「雪は天からの手紙である」など、宇吉郎や雪にちなむコーラスが披露されました。参加者にも歌詞カードが配られ、北大の恵迪寮歌「都ぞ弥生」など数曲を合唱し、小口氏も一緒に楽しみました。



▲合唱する片山津コーラス

---

### 訂正記事 — 雪の科学館通信6号（1999.3.31）10ページ

塩沢で撮った宇吉郎、荘田氏、関氏の3人が写った写真がありますが、この説明が間違っていました。これは、昭和34年2月の塩沢の実験室に低温室ができた時ではなく、その前年、昭和33年6月、実験所の外装ができ、こけらおとしをした時のものです。写真には、ユリの花が写っており、2月ではおかしいことがわかります。なお、宇吉郎が昭和34年2月の新築披露式に出席して講演したのは事実です。

## 企画展「新しい墨流し」、「雪氷ギャラリー」(7.1~8.31)

宇吉郎や恩師の寺田寅彦が研究し愛好した「墨流し」に新しい方法を導入し、独自の境地を開いた黒田隆二氏の作品を紹介しました。従来の墨流しは、広がるばかりのものでしたが、収縮させる方法を考案したことが、黒田氏の新しい点です。

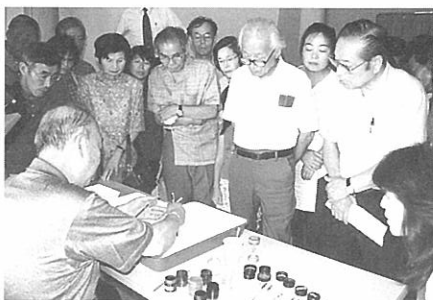
黒田氏はNEC主席技師長(当時)で、気象衛星「ひまわり」の設計・製作など、宇宙開発の分野でご活躍です。館に展示中のスペースシャトルに搭載した「人工雪装置」の製作を担当した方でもあります。

1階の特別展示ゾーンの壁を使って12点の作品を展示し、ビデオによってその技法を紹介しました。作品には幻想的なおもむきがあり、見る者の想像を誘う楽しいもので、好評でした。展示した作品は、通信特別号(1999.7.1)に、全点、カラーで掲載しています。

一方、2階のエントランスホールの壁面では「雪氷ギャラリー」として、最近の雪氷の話題を写真やパネルで紹介しました。西堀榮三郎記念探検の殿堂の低温室にできた「巨大霜」と、白山の千蛇ヶ池雪溪の「浮かない氷」の2つをテーマにしました。



▲黒田隆二氏



▲黒田氏の実演に見入る参加者

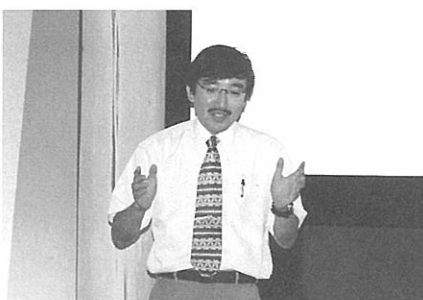
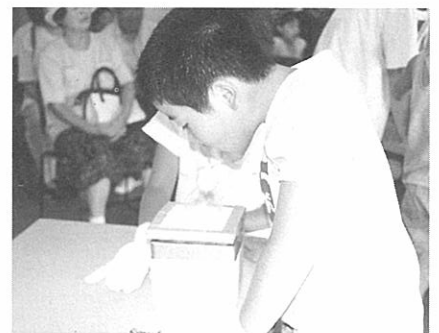
### 墨流しの講話と実演(8.7)

企画展にあわせて、黒田氏に墨流しの講話と実演をしていただきました。講話では、墨流しの歴史、墨流しが宇宙開発の技術とも関係があるという話、新しい技法を開発するときの苦心など、興味深い内容でした。実演では、黒田氏の鮮やかな手さばきに感嘆の声があがりました。参加者も黒田氏の手ほどきを受けて体験しましたが、なかなかうまくいかない人もあり、墨流しの奥の深さに触れた様子でした。

### 雪氷実験教室(8.1)

ドライアイスを使ってペットボトルの中の釣糸に人工雪を作る実験をしました。また、その頃出版したばかりの雪の結晶の写真集『天から送られた手紙』をスライドで紹介し、宇吉郎の人工雪と、ペットボトルの人工雪の関係をお話ししました。

夏休みで親子での参加が多く、今回は全ての作業を子供にやらせていました。子供たちは、雪の結晶が出来る様子を、興味深げに観察していました。



▲講演中の和泉薫氏

### 第3回雪と氷の学習会(9.12)

講師：和泉 薫氏(新潟大学助教授)

演題：「縦か横か—雪結晶配置の文化的背景」

雪の結晶の絵を描いたり、写真を配置するとき、6本の枝のうち、軸になる2本を縦(上下)にするか、横(左右)にするかは、国によって違いがある、というお話。日本やフランスは縦にすることが多く、アメリカなどでは横にするのが通例とのこと。和泉氏は、この点に注目し、その実態を様々な方法で調査して、違いの理由をさぐりました。そして、

国々の文化や歴史にまで立ち入った持論を展開されました。宇吉郎が行った配置は、時期によって微妙な変化があったことが紹介されました。興味深く、時には爆笑を誘うお話に、参加者は満足した様子でした。

この日はまた、「雪のデザイン賞」について、一般の人に初めて説明する機会になりました。このためもあって、近隣のデザイン関係者の出席もありました。

## 第2回 科学工作ひろば (8.8)

好評だった前年に引き続き、友の会との共催で開催しました。テントも張り、雪の科学館の外に10のコーナーを設けました。この日は好天に恵まれ、朝から親子づれなどが続々と訪れ、300人を越す入館者の多くが、イベントに参加しました。

前日、墨流しの講話と実演をして下さった黒田隆二氏が、この日はぐにゃぐにゃ凧の講師を引き受けられ、午後には、参加者の希望によって、スペースシャトルに搭載した「人工雪実験装置」の前で、製作や打ち上げのエピソードを紹介されました。

**スローで  
シャボン玉**  
大きくて長持ちする  
シャボン玉作り体験。

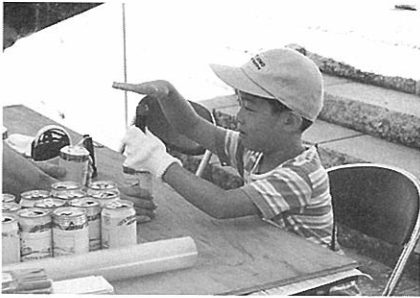
**【実験のテントで】  
ふしぎな仕切り板**  
形の外から見ると仕切りがあるのに、中から見ると？  
**空き缶分光器**  
空き缶のせと見え、ふしぎな色と形。  
**マーブリング**  
ハシキに墨流しの模様をつけます。

**中国のテラスで**  
**ビー玉万華鏡**  
まんげきょう  
外の景色がふしぎな模様に変ります。  
(申込みが必要 定員10人) 9時30分～

**ぐにゃぐにゃ凧**  
(講師：黒田隆二氏)  
横綱のない凧。  
望みでもよく飛びます。  
(申込みが必要 定員各10人) 10時～、11時～

**折り紙で雪の結晶**  
(講師：鈴木邦雄氏)  
折り紙で作るいろいろな形の雪の結晶。  
(申込みが必要 定員各10人 大人も申込みます。) 10時～、13時～

**氷のスタンドグラス**  
型紙を使って氷を作り、ある程度にはさんで凍ると？  
あまくひょう  
**復氷**  
切っても切れないのものは一家？  
にし  
**虹を作る**  
虹はどうしてできる？  
小さなビー玉で作る虹。



空き缶分光器



マーブリング



折り紙でつくる雪の結晶



シャボン玉



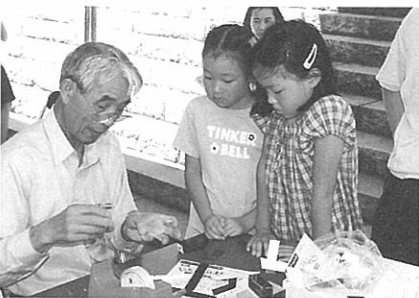
ぐにゃぐにゃ凧



虹をつくる



氷のスタンドグラス



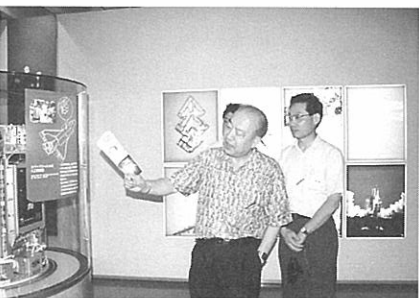
不思議な仕切り板



復氷



ビー玉万華鏡



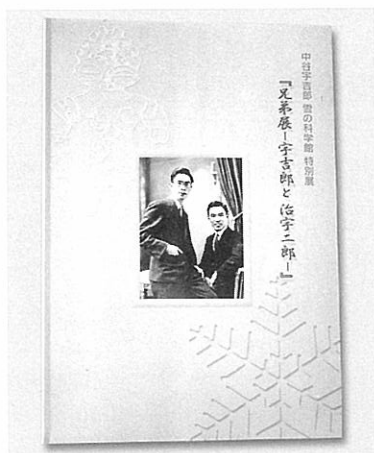
「スペースシャトル人工雪装置」の解説



友の会などのスタッフ

今年(平成12年)は8月20日に開催します。科学工作のコーナーを出したい方や、協力してもいいという方は、雪の科学館までご連絡下さい。

## 特別展「兄弟展－宇吉郎と治宇二郎－」（10.7～12.7）



▲発行された図録。  
写真の左が治宇二郎、右が宇吉郎

展示することができ、関心を集めました。

開催期間中、全国から中谷兄弟のファンが来訪しました。中谷兄弟が海外留学中のフランスで知り合い、親しく交流した数学者・岡潔（1901-1971）のゆかりの方々も訪れました。また、めったに見ることのできない貴重な考古資料が展示され、考古学関係者の来館も多くありました。

今回の展示では、兄弟の遺族、中谷芙二子さんと法安桂子さんの監修協力をいただきました。会場は、特別展示ゾーンだけでなく、初めて映像ホールを展示に使用しました。

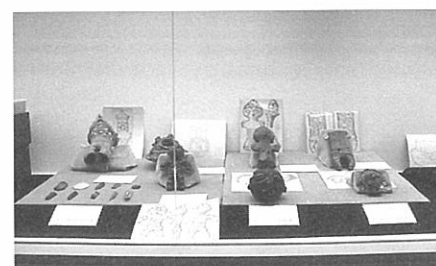
図録（A4、64頁 税込 500円）を発行しました。また、法安さんは、中谷治宇二郎著『日本縄文文化の研究』〔増補改定版〕（溪水社、本体価格3500円）を出版されました。

中谷治宇二郎は宇吉郎の実弟で考古学者です。34才の若さで亡くなりましたが、短い研究生活の中で多くの業績を残しました。治宇二郎が活動した昭和初期は、考古学の研究方法が模索されていた時代でした。治宇二郎は、科学的な考古学研究の確立を目指し、そこには、数学者・宇吉郎の影響がありました。

治宇二郎は3万枚にのぼるカードを作成し、考古資料の整理を行いました。今回、そのカードのいくつかに対応する考古資料が、2人が学んだ東京大学で発見され、特別の許可を得て借用し、展示することができました。また、治宇二郎は、兄と同様文才に恵まれ、旧制中学時代に書いた小説が芥川龍之介に賞賛されたこともありました。治宇二郎が仲間と共に創刊した同人誌「登音」も



▲兄弟間で交された書簡も今回初めて展示された



▲カードと共に展示された東大所蔵の考古資料

## 特別展関連講演会（10.31 セミナーハウスあいりす）

「中谷治宇二郎先生の頃の考古学」 橋本 澄夫氏（石川考古学研究会会長）

「中谷兄弟の文筆活動について」 井口 哲郎氏（石川近代文学館館長）

中谷兄弟に関して、考古学と文学の観点から、お2人に講演していただきました。

橋本氏は、特に石川県に関係した考古学に造詣が深い方で、治宇二郎についても詳しく、著書等で触れてこられました。講演では、資料をもとにして、日本の考古学の歴史をたどりながら、その中で治宇二郎の果たした役割について語って下さいました。

井口氏は、中谷兄弟が学んだ小松高校（旧制小松中学）の校長もされ、近年出版された「石川近代文学全集13」で宇吉郎の随筆をまとめられました。ご自身の歩みと中谷兄弟との関わり、本をまとめるとき苦労した点などにふれながら、中谷兄弟の文学について、幾つかの独自の視点から紹介して下さいました。

加賀市からだけでなく、中谷兄弟や岡潔のご遺族やゆかりの方々、中谷兄弟や考古学のファンの方々などが全国各地から参集し、両講師のお話に熱心に聞き入りました。



▲橋本澄夫氏



▲井口哲郎氏



## 「宇吉郎と治宇二郎展」が終わって

法安 桂子

平成11年10月7日から2ヵ月間、特別展「兄弟展－宇吉郎と治宇二郎－」が開催されました。

考古学者であった父、治宇二郎に関する展示は、平成4年に石川県立歴史博物館の特別展「みつけた！ 発掘物語」に『中谷治宇二郎コーナー』が設けられて以来のことです。

父には、「人類学雑誌」第39巻2号に『石川県江沼郡作見村字片山津の弥生遺跡』という短文の報告があります。これは考古学を学び始めて、初めての仕事ですが、郷里、石川県関係の発表はこの1篇だけです。

その後、主に縄文の研究をし、やがてパリに留学。研究を続けるうちに病を得て帰国し、34才で亡くなりました。思うことの何分の一も叶わず、学問への貢献も少なかった父にとって、これらの催しは希なことであり、また、科学館での考古学展ということも希有なことであったと思います。

特別展の準備にあたって、門外漢の私が果たして資料を整えることが出来るか危惧がありました。テーマを「兄弟愛」とうかがったときも、それを表現できる材料があるか、それも不安でした。しかし、準備に取りかかってみると、その心配は杞憂であることが段々分かって参りました。

考古学上のことは、元成城大学教授今井富士雄先生に、父が遺物をスケッチしたカードの価値、その遺物が現在保管されている場所などを教えていただきました。カードの記録を頼りに東北大学や母の実家があった岩手県の東和町などを訪ねました。東北大学で初めてカードに書かれている石器、土器、土偶などの遺物を見せていただいたときと、後に、東大で父がフランスで発掘した旧石器を見せていただいたとき、70年の空白が一挙に埋められた思いでした。東北大学では貸し出しもして下さるとのこと



でしたが、その後、遺物は父の母校東京大学からお借りできることになり、最も心配していた実物の展示は最良の結果を得て実現することになりました。カードと実物を並べたことで展示の価値が高められたことは幸いでした。

宇吉郎と治宇二郎の間には往復された手紙が数百通あります。その文面にはお互いを思い遣る気持ちが溢れています。それは単に肉親としての思い遣りだけではなく、専門は違っても学徒として助け合い、励まし合い、純粋に学問を楽しんでいる様子が伝わってくるものです。専門が違ったからこそ学問に対する考え方が広げられたことも窺われます。

御覧下さった方にも、分野の異なる展示によって興味を広げて頂けたとしたら、更に意義深かったと思います。

この手紙は特別展のテーマ「兄弟愛」について、巧まずに表現できる柱になりました。

この度展示した資料や手紙の殆どは、父の死後、伯父宇吉郎が保管し、没後戻されたものです。伯父は生前「自分が暇になったら、この資料や手紙を整理して本にしてあげる。」と言っておりました。それが叶えられなかったことは大変残念ですが、図らずもこの度「中谷宇吉郎雪の科学館」で『兄弟展』を催していただけたことで、宇吉郎の弟を思う気持ちが具現されたと思います。伯父宇吉郎も安堵しているのではないのでしょうか。

「科学館」での『考古学展』はさぞ御苦労が多かったと思います。「友の会」の皆様の御活躍にも頭の下がる思いです。好評に終わったことは遺族としても感謝にたえません。有り難うございました。



▲松原さおりさん（岡潔氏の次女）（10月31日）

◀特別展最終日（12月7日）に

右：法安桂子さん（治宇二郎の長女）

左：今井富士雄氏（元成城大学教授。治宇二郎と一緒に遺跡調査に東北地方を回られたことがある。）

# 大英博物館と宇吉郎の雪

樋口敬二（名古屋市科学館館長）

「大英博物館から雪の結晶の写真を送れ、といってきたよ。」 そんな中谷宇吉郎先生のうれしそうな言葉を聞いたのは、私が北海道大学理学部物理学科の学生であった時で、研究室のメンバーが一室に集まって昼食をとっていた際のことであった。1950年から51年にかけての頃と思う。

中谷先生がうれしそうにしておられたのは、1928年から文部省の留学生としてロンドンに滞在され、大英博物館というものをよく知っておられたので、そこに自分たちの撮影した雪の写真が飾られるようになったことに感慨を抱かれたのであろう。

一方、私の方も、その話を聞いてうれしく思ったのは、その写真が撮影された現場にいたからである。1950年の2月、大雪山旭岳にある仰岳荘で、雪の結晶の映画の撮影がおこなわれ、私もそれに参加していたのである。

しかし、この中谷先生の言葉をきいて以来、ふつと大英博物館に関する話題に接したことはなかった。それが、半世紀を経て、思いもかけず、中谷先生が送られた写真とめぐり合うこととなり、「人生、楽しいかな」という思いに浸っている。昨年（1999）7月、IUGG（国際測地学地球物理学連合）総会に出席の途次、ロンドンを訪れた時のことである。

7月17日、ハイパークの南にある自然史博物館（Natural History Museum：NHM）を訪れ、2階の鉱物（Minerals）部門を見た。広い展示室にずらりと並んだ標本箱の列を縫いながら、鉱物、結晶の標本をざっと眺めつつ歩いていた私は、標本箱の一つに雪の結晶の写真が並んでいるのに気づいた。それが、Bentleyの写真ではなく、中谷先生が戦前に十勝岳で撮影されたものでもなく、戦後に大雪山で撮影された写真であることが、一目でわかったのは、「斜め照明による影写真の方法」とよばれる新しい照明方法によって撮った写真だったからである。その上、その照明方法によって雪の結晶の表面構造が浮き上がるように鮮明に見えることを、私自身が撮影の現場で知っていたからである。

だから、NHMの標本箱の雪の写真を見た時、冒頭にあげた中谷先生の言葉がよみがえり、「アア、

これがあの写真か」と、いいよのないなつかしさに駆られた。

ところで、中谷先生は、「大英博物館から…」といわれた。この言葉の記憶については、私は自信がある。

それなのに、雪の結晶の写真があるのは、大英博物館（British Museum：BM）ではなく、自然史博物館（NHM）である。これは、どういうわけか。その疑問は、IUGG総会の帰途、NHMを再訪し、鉱物部門担当のPeter Tandy氏に聞いた事情によって、氷解した。

Tandy氏によると、BMの設立は1753年、場所は現在のブルームズベリーだが、1881年に別にBMの自然科学部門の建物がハイパークの近くに建てられた。それが、そのままBMから組織上独立したNHMとなったのが、1995年である。だから、1950年か、51年に中谷先生が雪の写真を送られたのは、当時のBMの鉱物部門あてであった筈であり、Tandy氏は、「今、ここ、NHMにあるこの写真が中谷博士から送られたものであることは間違いない」と断言した。

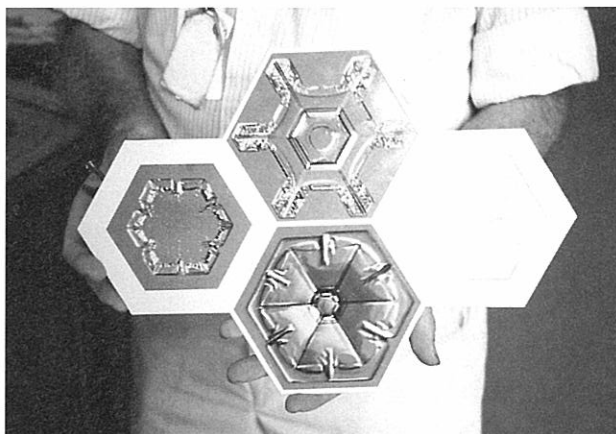
帰国して、早速調べてみると、中谷先生が、「自然の恵み－少国民のための新しい雪の話－」（『日本のこころ』所収）に、新しい照明法による写真撮影を紹介したあとに、つぎのように書いておられるのをみつけた。

この写真は、大変評判がよくて、ロンドンの大英博物館の鉱物部門の主任バニスター博士から、博物館に氷の結晶の標本として陳列したいから、引伸し写真を四、五枚送ってくれないかといつて来た。早速送ってやったら、大変喜んで、すぐ陳列したという返事があった。なるほど雪の結晶もたしかに鉱物の一種である。とにかく日本の雪も大英博物館へはれば、大いに世界的になったわけである。（昭和26年5月）



▲ロンドン自然史博物館

では、バニスター博士は、どのようにして「この写真」を知ったのか、これについては、Tandy氏にBMの記録を調べるようにたのんだり、中谷先生の資料や関係者の記憶を確かめているが、まだ不明である。宇吉郎の事跡研究の一つの課題である。(なお、中谷先生はじめ、関係者で、NHMの写真を見たという人は、誰もいない)



▲ロンドン自然史博物館における雪の結晶の写真の展示  
(上の四つは岩波写真文庫『雪の結晶』所収の写真と同じである)

## アラスカ大学に宇吉郎の展示

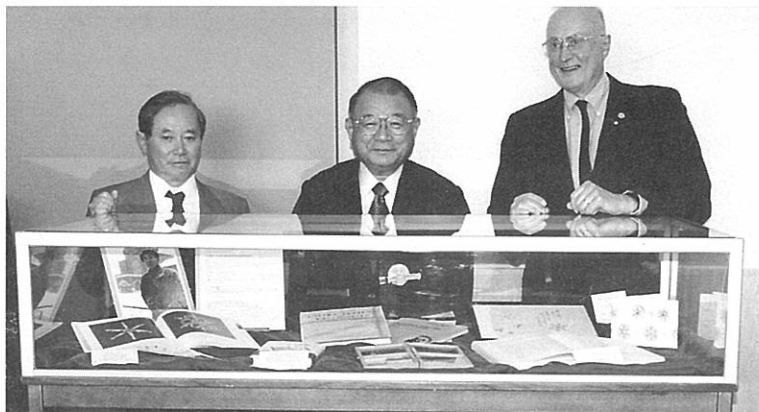
米国アラスカ州フェアバンクスにあるアラスカ大学に、昨夏、日米が協力して国際北極研究センター(IARC)が開所し、その一角に、中谷宇吉郎の展示コーナーができました。

展示を準備したのは、宇吉郎と同時期にシカゴの雪氷凍土研究所(SIPRE)で研究し、宇吉郎と親しかった、アラスカ大のカール・ベンソン名誉教授です。

随筆「アラスカ通信」(『花水木』所収)にあるよ

うに、宇吉郎は1949年に初めてアラスカ大を訪問していますが、それ以来の同大と北大の親密な交流を記念して、宇吉郎の資料を展示することになったものです。

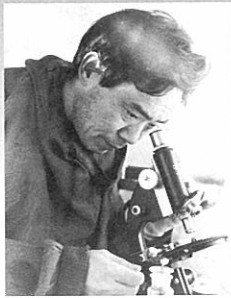
ベンソン名誉教授は、北大総長の丹保憲仁氏や北大名誉教授の東晃氏に展示の協力を依頼しました。雪の科学館もこれに協力し、写真集「天から送られた手紙」や「中谷宇吉郎雪の物語」等を送りました。



▲アラスカ大学の宇吉郎展示コーナーで。右から、ベンソン名誉教授、丹保北大総長、赤祖父俊一IARCセンター長。(1999.8.27 IARC開所式で)北海道大学提供



# 12年度の行事予定



©UN Limited

## 中谷宇吉郎生誕百年記念事業

今年に加賀市出身の「雪博士」中谷宇吉郎(1900-1962)の生誕100年に当たります。宇吉郎は雪と氷の研究で世界的に知られた科学者で、また、たくさんの味わい深い随筆を書き残しています。

### 中谷宇吉郎生誕100年記念『式典』と『フォーラム』

**7/1** <sup>±</sup>

午後1時～『式典』  
午後2時頃～『フォーラム』

**入場無料**  
(定員150名)

雪の科学館まで  
お申し込み下さい。

片山津地区会館テリナーホール  
協賛/白山麓僻村塾

### 雪のデザイン賞公募作品展

中谷宇吉郎の生誕百年を記念して、全国公募していました「雪のデザイン」の応募作品の中から、優秀作品を一堂に展示します。精微で清らかな雪の結晶をテーマとしたさまざまなデザイン作品を是非ともご覧下さい。

**6/17** <sup>±</sup> ~ **7/2** <sup>日</sup>

入場無料

#### 加賀アートギャラリー

JR加賀温泉駅前 ☎0761-72-8787  
入場10時～17時半(18時閉館) 火曜休館

### 中谷宇吉郎生誕100年記念フォーラム

テーマ『中谷宇吉郎の世界とその魅力』



パネラー  
**池澤 夏樹**  
作家  
白山麓僻村塾塾長



パネラー  
**樋口 敬二**  
名古屋科学館館長  
宇吉郎門下で雪を研究



コーディネーター  
**高田 宏**  
作家  
加賀市出身

#### 《フォーラムの後》

- 1日(土) 17時頃から「祝賀会」  
(同会場、会費制、友の会主催、申込み必要)
  - 2日(日) 10～12時「宇吉郎ゆかりの地めぐり」バスツアー  
(同会場前集合、無料、友の会主催、申込み必要)
  - 2日(日) 19時～「アルバートロト ピアノリサイタル」  
(同会場、有料、片山津音楽友の会主催)
- 詳しくは、雪の科学館までお問い合わせ下さい。

### 8月から11月にかけて

- 8月19日(土) 親子雪氷教室 13:30～15:00 [雪の科学館]  
講師：中野智子さん(東京都立大学)
- 8月20日(日) 第3回科学工作ひろば 9:30～16:00 [雪の科学館]
- 9月9日～11月5日 湯のまち雪のデザイン展 [片山津温泉の検番と旅館]
- 9月23日～10月15日 寅彦と宇吉郎の絵画展 [片山津地区会館テリナーホール]
- 10月1日(日) チンダル食の祭典 [総湯の広場]
- 10月1日～5日 日本雪氷学会全国大会 [加賀観光ホテル]
- 10月2日(月) 日本雪氷学会公開講演会 13:30～ [加賀観光ホテル]

### 加賀市以外での生誕100年記念行事

- 北海道 北広島市図書館 (☎ 011-373-7667) で  
7月13日～30日 中谷宇吉郎生誕百年展  
15日(土) 講演会(講師：大森一彦氏)と交流会 14:00～  
16日(日) 子供雪氷体験教室(講師：平松和彦氏) 10:30～、14:00～
- 東京 渋谷区ヒルサイドフォーラムで  
12月11日～2001年1月13日に宇吉郎展(仮称)を開催する予定

詳しい内容や、この他の企画は、今後発行されるポスター、チラシ等をご覧下さい。

### 中谷宇吉郎 雪の科学館 インフォメーション

開館時間 ● 9:00～17:00  
(入館は16:30まで)

■ 映画「科学する心～中谷宇吉郎の世界」  
(25分)の上映開始時間 [2階映像ホール]  
9:30 10:30 11:30  
13:00 14:00 15:00 16:00  
(都合により、変更することがあります。)

休館日 ● 水曜日(祝日を除く)  
年末年始

入館料 ● 一般：個人 500(420)円  
( )内は20名以上の団体料金  
高齢者(満70歳以上)は 250円  
高校生以下及び心身障害者は無料

アクセス(車で) ● JR加賀温泉駅から10分  
小松空港から15分  
北陸自動車道  
片山津インターから5分

加賀市ホームページアドレス  
<http://www.city.kaga.ishikawa.jp/>